
運命の導き…妖精の尻尾の物語

夢をあまり見ないヤツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命の導き：妖精の尻尾の物語

【Nコード】

N4981X

【作者名】

夢をあまり見ないヤツ

【あらすじ】

とあるキツカケで妖精の尻尾を手助けする魔導士…
夢で見たものを追い求めその先にあるものは…！
原作なんて関係ねえ！という感じでお送りします

始まりの時

あれ？僕は何をしているんだろう…

何も思い出せない…何も感じない…何も見えない…

自分が生きているのかすら判らない…

…遠くから何かが近づいてくる！

『おまえの運命にゆだねよ…神の導きに…』

「はっ!？」

「また夢か…」

僕の名前はディメル・フォラク

旅をしながら人助けなんかをしているフリーの魔導士だ

今はマグノリアという所に来ている

一週間居るつもりで今は三日目

マグノリアに来てから変な夢を見る

「全く…あの夢は何なんだ…」

まあマグノリアに来た理由としては妖精の尻尾にある事を伝える事

なんだけど…

何かギルド内が暗いから入りずらかったけど…

何だ？今は逆に騒がしいぞ？

「何かあったのか…？」

とりあえず町の人に聞くか

「何かありました？ギルドで…」

「ああ、六魔將軍を倒しに行った連中が戻って来たんだ」

「…っ！六魔將軍だって…！」

「何でも他のギルドと一緒に倒したらしいがな」

それでも凄い…！バラム同盟の六魔將軍を倒す何て！

「早く行こう…」

ただいま移動中…ただいま移動中…ただいま移動中…

「よし…開けよう」

『ガチャ』

開けた時 目に入った光景に言葉を失った

「宴だ！宴だ！」

「酒えええええ！！！！」

・・・うるさーーーー！！！！

「ん？おまえ誰だ？」

誰か話しかけて来た この髪型…色…目まちがない…週ソラにも
でてた…

「サラマンダーのナツ…か」

レッツ！小声

「初めましてディメル・フォラクです すいませんがマスターはど
こに…」

「じっちゃんならそこに居るぞ！」

ナツ・ドラグニルを記憶

へえ六魔のゼロを倒した人か

いや人という言い方は違うかな…？

「ありがとうございます」

で、マスターマカロフの所に行った

ん？マスターの横に居るのは魔神と天空の巫女か…

確か天空の巫女は化け猫の宿所属のはず…まあ良い

「すいませんマスターマカロフ」

「なんじゃ？おぬし？」

「実は評議会からで…」

「ほう…」

「闇ギルド 三日月の装飾を倒していただけませんか？僕も強力するのです」

「……………なぬ！？」

三日月の装飾

「なぬって言われても困るんで…」

まあ良い

マカロフ・ドレアー記憶

ミラジェーン記憶

ウエンディ・マーベル記憶

ほう…マスターマカロフは孫を破門

ミラジェーン…魔神再来

化け猫の宿…意思を持った幻…か

他にも何人か記憶した

気になるモノがあつたな…

ルーシィ・ハートフィリア

あのレイラ・ハートフィリアの娘ねえ

魔導の真髄…いかなる魔法も一つだった…気になるな

「まあ良いじゃろう…」

「ではメンバーは…」

「ふむ雷神衆、ジュビア、ガジル、ミストガン、ギルダーツはクエ
ストか…」

「で、メンバーは…」

「よおおし！エルザ、ナツ、グレイ、ルーシィ、ウェンディ行っ
てこい！」

「……………」

で、このメンバーと来たのだが…

「うぷ…トロイアかけて…」

「今使ったばかりですよ？」

「効果うすれるもんね」

「くそ炎が！」

「何だとグレ…うぷ」

「やめないか！」

「あはは…」

何だ？この会話

おかしいだろ…

「もうつきますよ」

場所は知ってた

「生き返ったー！」

「生き返ったって今まで死んでたんですか？」

「……………」

うむ僕に冗談はきかんぞ ナツとやら

でもグレイ・フルバスターとかエルザ・スカーレットを記憶したけど

妖精の尻尾って辛い過去がある人ばかりだな

「扉開けますよ」

ガチャッと音を出して入ったが……………寝てる

三日月の装飾って活動夜って聞いてたけど…まだ寝てる

ちなみに今は夕方

「えーと、この寝てる人達を倒せば…良いの？」

「はい」

「起こさないで良いのだな？」

「いや起こしますよ」

「何故？」

「質問ばかりですね　起こさないと今回取るモノが手に入らないんですよ」

「……………」

質問ばかりですねが効いたか

「起こすにはどうすれば？」

「マスター倒します」

「……………」

またか…静まりかえりやすいな…この人達

「でことで…ドーン…」

相手マスター瞬殺

驚いてるな。警戒してるな。悲しいな…

「あのって…ギヤアアアア！！」

いつのまにか起きてたヤツラに攻撃された

袋だたき！

驚いてるな。警戒してるな。悲しいな…

え？二回目？そうだった？「記憶力うたがうぞ」誰ええええ！！！！！！

あ、そうだ相棒がいたんだ

「いけデフィ！」

「その言い方やめろデルラフィットルだ」

「長いから」

「へいへい 血造形！金槌！」

こいつはデフィ

血造形を使う魔法生物 種類は知らない

「終了…」

みんなポカーンとしてるな

驚いてるな。警戒してるな。悲しいな…

え？飽きた？最高の褒め言葉をどうも

…グレイ・フルバスターだけ居ない

「おいナツ そのこのヤツから聞いたんだけどよ」

「何だグレイ」

「近くに竜に会ったことがあるヤツが来てるぜ」

「本当かグレイ！」

「…！！」

「竜…」

竜…あの日の…

三日月の装飾（後書き）

次回の話からはダフネはいります

次回はキャラ紹介ですけど

主人公設定

ディメル・フォラク

14歳 男

説明..

自称フリー魔導士だがいつも妖精の尻尾周辺をうろろうしている

得意技は暗算とバク転と穴掘り 逆立ちができない

好きなものは自由 嫌いなものは炭酸飲料と竜

過去に何かあったらしいが誰にも話さない

だがデフィ曰く夜中に人物名や町の名前を言っているという

実は自分より3歳以上年が離れている人が苦手

武器は弓矢

竜が嫌いなのに滅竜魔導士に興味をもっている

極度のめんどくさがりでクエストも簡単なのしか選ばない

普段は丁寧だが時々荒々しくなる

怒ると何も話さず笑いながら攻撃してくる

左手を人に見せない

本人曰く呪われている

バックを持ち歩いておりその中の5冊の本を大切にしている

体は滅竜魔導士の様に固い

同じ事を何度も言い忘れる癖がある

ダメな事としては人を怒らせるのが得意

敵を倒す時に「封鎖する」と言うことが多い

別名「城壁の管理者」

外見..

黒にほんの少しだけ緑を混ぜた様な髪

その髪の毛は男にしたらずし長い

髪と同じ感じの色をした目

黒を主体として水色の文字がある服

白と緑と黒の色がついた薄い上着

灰色に赤いラインが入ったズボン

魔法…

- ・ 生命の記憶

喋った相手の記憶と情報を読み取る

- ・ 守備魔法

自分や仲間の守備を固くしたり少しの時間相手の動きをスロー、見切る

壁を出現させ閉じこめる

- ・ 輝きの獣

宝石の様に輝く竜の様な獣を呼び出す

- ・ チャーリリバース

輝きの獣を左手に吸収しその力を得る

- ・ 夢元・武式

弓矢に特殊な魔力を込め放つ

- ・ 夢元・陣式

特殊な魔法陣を出現させる

- ・ 夢元・滅式

ディメルにはめずらしい特殊攻撃

不明ソーサラー第二号

このコーナーではアンケート出したり

質問への回答を行います

まだ感想が来てないから無意味ですが…

アンケートは今出します

1，キャラ募集

この小説に出したいオリジナルキャラを考えて下さい

できれば見た目や性格、魔法を書いて下さい

2，魔法募集

さすがにヤバイのでこれも募集します

属性、メリット、デメリット詳しい情報を書いて下さい

3，直した方が良いところ

これもお願いします こういうのがあった方ができるんで…

書かれた事はできるだけ直す様にします

4，番外編

番外編【フェアリーヒルズや妖精学園など】をやった方が良いか

やらない方が良いかです

あと感想も募集してます

いつも見て下さる読者様ありがとうございます

竜の誘い…

「言ってみる価値はあるんじゃないか？」

「おいハッピー行くぞ！」

「私も行きます その竜グランディーネかもしれないから…」

「竜…あの日の…地獄の覇王…」

そして滅竜魔導士と僕は旅の宿ライズへと向かう

僕は…ある事が気になる それだけだ

しばらく行くとあった人気の全く無い…宿

そして部屋を一つ一つ探す…

まあそれがさっきまでで今は奥にある怪しい扉の前

ノックすると眼鏡かけた人が居て

部屋の中に無理矢理入れられた

「夢のダイエット食品メタモちゃん！」

「はい猫ちゃん今度はよく言えましたね嬉しいからサンプル上げちゃおう」

などとくだらない事をやっている

約二人興味があつたみたいだが

「竜？あれ商売上の嘘」

……しばらく聞いてない

いや聞く気もない

だが…気付いたとき

目の前ではグレイ・フルバスターとナツ・ドラグニルが戦っている

自分の周りには……

「何これ」

ドラゴノイドざつと50体

勝ち目あるのか？確か自分と同様の能力を持っているとか何とか

まあ良い僕は自分にできる最高の事をするまで

例えばこの状況だと

「全部…倒して良いんですよね？」

そう言い僕は始める 戦闘開始だ！

「夢元・武式 六ノ型 乱れゆく花火…だっけ？」

この技は相手を数万本の不思議な動きをする矢で攻撃する

これで40体倒す 残りの10体は逃げていった

雑魚だね これくらい

また影だ またドラゴノイドかと思っていたら…

「人……………っ！！おまえは！！！！」

目の前に居るのは間違いない数年前の仲間です3年ほど前居なくなつた

キュウ・メラルバ

白銀の髪に青いバンダナ…キュウのトレードマーク

「何故ここに…キュウが…」

「……………」

キュウはどこか冷たい…まるで感情無く暴れ回る獣の様に…

ただ静かに…静かに殺気をだしている

文目（あやめ）

「何故…ここに？」

何も通じてない…

そしてキュウは静かに走り僕に斬りかかる

「っ！」

何とか跳ね返すがまたすぐに来る

「やめろ…お前とは争いたくない！」

僕は避けているだけだがキュウは攻撃をやめない

何故だ…何故なんだ…あの優しかったキュウが

キュウは僕の仲間だった

キュウはいつも優しい言葉をかけてくれた

キュウはいつだって僕の側に居てくれた

僕は避けるのをやめ攻撃に耐え続ける

「あの時の言葉を…」

—そして記憶が蘇る—

その日僕はクエストに失敗して落ち込んでいた

「はぁ…やっぱ魔導士にはむいてないのかな」

まだ魔導士になって一週間だった

今になっては魔法もうまく使えなかったのだ

成功しなくても普通くらいだったのだが

その時は失敗するのが怖くてたまらなかった

そんな時に失敗してしまい

魔導士になってよかったのかと思っていた

そんな時キュウは声をかけてくれた

「そんな事無い 俺だって色々経験して色々失敗してきた」

「でも僕は落ちこぼれだ…何をやっても…」

「自分の弱いところを知っているんだ…強くなれる」

「何でそれがわかる？」

「何となく…かな？俺はまだ自分の本当に弱い所はよくわからない」

「……………」

「君はそれを知っている…」

「そういわれても…」

「はい！これ上げるよ文目^{あやめ}花言葉は希望」

「希望…」

「そ！希望を持って生きていけば何か良いことがあるさ」

この日があったからこそ今の自分になれた

この言葉があったからこそ

“希望”

次の瞬間…僕はキュウの手にある物を握らせる

あの日からずっと持っていた物

文目^{あやめ}の花を

「思い出して…！この花を…！希望の力を…！」

キュウと一瞬心が通じた気がした

伝達魔法などじゃなく

「……………ディメル？」

「キュウ…！」

再会したんだ仲間と

「で、キュウにこんな事したのは誰なのかな？」

「俺にしたの？さあ、誰だったっけ」

二人の目は確実にダフネを向いていた

反撃とドラゴノイド

その頃ダフネはドラゴノイドでマグノリアに向かっていた

「さて…どうする？」

「ここは俺の魔法で…」

「風輪！」

風輪この魔法は…

言うまでも無く風につて進む

…？ 知るか？ 褒め言葉どうも

着いた頃には荒らし回ってたけど…

そして何か悪口を言えと言われたんで言ってみる

「雑魚が」

「あなたの脳味噌ありますか？」

「アイスランドポピー花言葉は慰め 一番合う言葉だね」

最後のはキュウ真ん中のは僕最初のは…誰？

まあ良いか

「あんだとコラーーーーー！！！！」

うむ…面白い

で向こうの方から合体魔法って言葉が聞こえたのは気のせいかな？

さらに遠くで梅干しという言葉が聞こえたのも気のせいかな？

「うゝむ…梅干しと合体魔法…合体梅干し」

想像中…想像中…想像中

「うぷ…」

「どうした？」

「ちょっと吐き気が…」

「そう…」

「無視すんなやー！！！！」

怒ってる…デスネ！

さっき梅干しって言葉の他に弱点って言葉も聞こえた気がする

「なるほど…」

行くか…

走り出せ♪走り出せ♪古くはないはず

ドラゴノイドのコアみたいな所に突っ込み破壊しようとする

「壊れろおおおおお!!」

夢元・滅式…壺

「今は花言葉言わなくても…良いね!」

炎蜜

「ギヒッ」

鉄竜剣

…最後のはガジルか

苦手なタイプ

そして壊れるコア

ナツに吸収されてく炎

魔力に耐えられず状態のドラゴノイド

そう…勝利したんだ

虹の桜

明日はお花見らしいので手伝いをする事に

「何で僕が…」

「まあまあ良いじゃないか」

今向かっているのはガルナ島

何でも月の石を取ってこいだとか何とか

船乗りの人達は普通に乗せてくれる

前来たときは乗せてくれなかったけど？

「で月の石って何？」

「月の石は何でも魔よけの効果があるらしく旅人には重宝されてるらしい」

「それを何で魔導士が？」

「綺麗らしいから観賞用とか？」

「なるほど」

月の石 一回見たいな

「おまえらとつくにガルナ島ついてるぞ？」

「ありがとうございました」

「気をつけろよ最近カボチャの化け物が居るらしいから」

そんなこと聞かずに森の中へと進む

「ほく古い木の周辺にあるんだって 魔力の強いところ」

「これとか？」

「そう…そんな感じの」

「探す？」

「探す」

で木の周りを調べようとした

グシャ

何か踏んだ？

「カボチャだね」

カボチャが震えてる

「カボチャか」

カボチャが泣いてる

こういうときは無視！

そう言うことで月の石ゲットで帰る

「花見の当日」

「ワイワイ」

「ガヤガヤ」

「さ…騒がしい」

「同感」

「ビンゴ当たらないんだけど」

「ビンゴだ！」

エルザ・スカーレット1位

貰ったのは昨日自分達で取ってきた萎れたヤツ

「キュウあれの花言葉は？」

「哀れ」

「……………」

あれ？ビンゴだ

貰ったのは月の石

「…キュウこの石言葉は」

「哀れ」

「……………」

そんな感じで一晩中騒いでいたヤツもいたが

ビンゴですっかり満足したので帰った…

虹の桜（後書き）

感想やアドバイス、悪い点などあったらお願いします

大仕事の手伝い日和

「何故!？」

「自称フリーならその辺詳しいじゃろう」

「フリーですが…」

「とにかくウエンディのクエストの手伝いをしてくれんか」

「………」

「行ってやれば良いんじゃない？」

「あゝい」

何故こんな事になっているかというと

新人だったらしいウエンディが大仕事をするとかどうとか

それで同行する人を決めていたのだが…

「何で僕が…」

「良いではないか」

「いや雷神衆のリーダーが居るだけで良いと思うんですけど…」

「あの辺にあまり妖精の尻尾は行っておらん」

だそうだ

雷神衆のリーダーというのはフリード・ジャステーン

別名は暗黒のフリード

相当な実力者らしいし僕でも記憶できなかった魔導士だ

おそらく隠された方の目を見ないと記憶できないんだろうな

何はともあれ出発だ…

駅に向かおう

「…………え」

「どうする」

「歩いていきます」

「…………ええ、え、え、え…」

ちょっと謎の言葉を発したのは無視しておくれ

ワイも年なんだよ…ゲホゲホ…

移動中…移動中…

「ブツブツ…」

自己解説 はあ…歩くのめんどくさい

そして話すのもヤダ

そりゃいつものクエストなら良いけど

人のクエストの手伝いだなんて

僕は自分と年が離れた人が苦手なのに…

「…何をブツブツ言っている」

「…何言ってるんですか？」

「助けて……………」

僕は声が出ないでいた 上の何だって？

何だろ…って猫の声じゃないか！

いままで気がつかなかった 自分の近くに青猫が居るなんて

「暑…「氷」ピキーーーーン」今凍らせた

この適当なクエスト…夜には好物の羽魚を食べた

「まずい…」 「確か向こうに木の実があったよ…」

と言う声の中食べた 次日は砂の化け物が居た

「天竜の…咆哮!!!」

という声が聞こえた

何故こんなに適当なのかって？あまりにも絶望だからだよ

そして目的地についてから倒れた

「こいつらかたしてくれ報酬は出す大仕事だよ」

「これが初めての大仕事……」

気絶する前にこんな声が聞こえてきた気がする

24時間耐久ロードレース…罰ゲーム有り!?

「最近雑用が増えてきた気がする」

「何だよ急に?」

「こんどはレースだって…」

「おまえ馬鹿じゃんWWW」

今回やることになったのはレースの邪魔係

てか何でギルドのじゃないヤツに頼むんだ…

て事で邪魔してみた

1, 術式を消す

前の一件があるので仕返しに消してみた

何ー！！的な感じになっていた

2, ワイバーンの鱗を隠す

これで大抵の人を足止めたがシャルルという猫に3秒で取られてしまった

3, マタタビ

仕返しにマタタビを出してみた効果無し

4, 綺麗な水

これでジュビア・ロクサーを足止めする事に成功

5, 紅茶

何となく紅茶を出してみたシュルルが猫が飲んだ

やったぜ！

6, 高い位置

ワイバーンの鱗を高い位置にセット

猫二匹の足止めに成功させられなかった

7, ガス

猫に鱗を取ったから炎を遠隔操作してガス欠にした

8, ガスの煙

猫鱗2！さっきのガスをばらまいて目眩を引き起こす

…これぐらいか

次の日のソーサリーは笑えた

本人の目の前で大笑いしたため殴りかかってきた

返り討ち！いつとくけど僕14歳だよ…子供だよ！？

そういえばジュビアとエルザが大切にソーサリー持ってたな

「日記書き終わったか？」

「何とか」

「外でこんなの拾ったぞ」

「あゝい」

「何故ハッピー!？」

「弱点探つてこいって言われて…」

「よし！あとで潰す」

「おいおい…」

そんな感じの変な夜の出来事

ギルダーツ

ある日僕はマグノリアの少し先にある所に居た

すると奥の方から男が歩いてくる…

すれ違う時にすさまじい魔力を感じた

いや男からでは無いかもしれない

隠れててよく見えなかったが傷があった

その男も強力な魔力だったが…

傷…そこにあった魔力は黒く汚れた魔力…

そしてその傷は竜の爪みたいな…

得体の知れない凶悪な跡だった

あの夢にでてきた感じた物に似ている

そして男の後ろの男とは違う黒く大きな影

そこで1時間ほど硬直していた

マグノリアに戻るとどこかいつもと違う感じがした

そして妖精の尻尾に入る

「勝負しろギルダーツ！」

「後でな」

…な？ ナツと戦っているのはさっきの男

そういえば記憶してないな

ギルダーツ…記憶

…………ギルダーツ…ですか

凄い魔導士って聞いてるけど…

「ギャ！」

「ナツうゝ」

確かに凄いな

で、もう二つ

女ったらし…

一人だけ結婚した女性が居るが死んだと聞いている

「ギルダーツさん…ちょっと良いですか」

「ん？」

「僕と勝負してくれませんか？」

「後で…な!？」

ギルダーツの腕をキャッチ

「改めて言います僕と勝負してくれませんか？」

「おもしれえ…受けて立とうじゃねえか表へ出ろ！」

周りからは終わったとか馬鹿とか色々言われている

僕が戦いを挑んだ理由はあの不気味な魔力について

戦いばわかるかもと考えている

行方を知るために………

真の強者

戦うのは次の日

屋根がある所で戦う

何故かという tomorrow は雨らしいからだ

そして一日は短い…………

「勝負…ですね」

「まだ心の準備が…」

「問答無用！」

「まだ心の準備ができてねえっての…クラッシュ！」

それを避ける いや避けないと死んでいただろう

「夢元・武式…雷光嵐！」

「クラッシュ！」

「さすがですね」

「おまえもやるじゃねえか」

「夢元・陣式…牙鋼柱」

この技は鋼でできた尖った柱を無数に出現させる魔法

「夢元・陣式…柱壁陣」

この技は柱を壊せない様コーティングする魔法

「夢元奥義陣式…柱紋陣列伝覇！！！」

これは柱で描いた魔法陣に魔力を注ぎ込み

相手に10の属性ダメージを与える

簡単に言えば一人合体魔法？

「なっ！！」

ドゴォーoooooooooooo

とてつもない爆発音

「…くっ　ここまでやるとはな」

それでも耐える…ギルダーツ

本当凄いや…そう本当に

一方ある所では…

「ウェンディ」

「え…？その声…」

「！！」

「まさか君がこのギルドに来るとは…」

「……！！！！ジェラルル！！！！？」

「ど…どういう事！？あんた確か捕まって…」

「それは私とは別人物だ」

「そんな……！」

「どう見たってアンタ ジェラルルじゃないっ……！」

「私は妖精の尻尾のミストガン」

「7年前はこの世界の事はよく知らず君にはジェラルルと名乗ってしまった」

「え？」 「（この世界！？）」

「ま…まさか…」

「あなたが7年前の…あの時のジェラルル…」

消えゆく街…消えゆく仲間…

「ずっと、ずっと会いたかったんだよ」

「会いに行けなくてすまなかった　だが今は再会を喜んでいる時間は無い…」

「今すぐこの街を離れるんだ」

「ジェラルル！！！！」

「私の任務は失敗した…大きくなりすぎたアニマは私一人の力では抑えられない」

「間もなくマグノリアは消滅する」

まだ雨は降り続けるのであった…

ここはディメルとギルダーツが戦っている所

「やっぱり強いですよ…」

「おまえこそ…な！！」

ギルダーツが殴りかかってくるのを回避する

ちなみに今これを見ているのは

グレイ、カナ、マカロフ、エルザ、寝ているナツ

ギルドにはミラやジュビア、ルーシィが居る

そして街の住宅街…路地裏には……

「違う！」

「こいつも！」

「こいつも！」

鉄竜のガジルは自分だけ猫が居ないので探していた

空腹嫌いが空腹になりながら

「ぐほっ」

そして倒れる

「火竜や新入りのガキにネコが居て…何故同じ滅竜魔導士のオレにはネコがいねえ？」

「！」

その時ガジルが見つけたのは救世主…じゃなくて猫

そう、ただの猫 普通すぎるほどの…猫だった

「お…おお…」

さらにギルド内では

ミラとエルフマンがカルディア大聖堂へ

死んだ妹の命日には行ってるらしい

さらに…違う場所

ウェンディは走る

青年…ミストガンに話された事をギルドの人に伝えるため

「みんなー大変なの!!!!!!」

「空が……」

ギルドが消える…街が消える…

「そ…そんな…」

「一体何が起きたの!!!?」

さらにギルダーツと戦っていたディメル

「消えた…だと？」

ネコ探しのガジル

「何だよ…こりゃ」

爆睡状態だったナツ

「ぐごっ!？」

そして…ミストガン

「アニマ…」

三人の滅竜魔導士と青年、少年は消えた世界に残された

もう雨は降っていない……

パラレルワールド

ここはディメルが居る場所

「…この街も…か」

「まあ良い誰か居ないか探すか」

僕が5歳の頃…僕の住んでいた町が消えたことがある

その時両親を失った

朝起きたらもう…消えていたんだ

あの時は今でも覚えている

絶望や恐怖

でもあの時僕は何も探さなかった

人が居る可能性を無いと断言していた

今では後悔している

あれ？…僕はその後どうしたんだろう？

思い出せない…何か忘れている様だ

だが今はいい また後悔しないように…

今は人を探そう

一方その頃

「こことは別の世界エドラス　そこでは魔法が失われ始めている」

.....

「超亜空間魔法アニマ」

.....

「この世界に送り込まれたのよ」

.....

「いっちょ行くか!？エドラスってトコ」

二匹の猫と二匹の竜

魔力が有限の世界エドラス

送り込まれた者たち

さらにディメル

「居ないか…」

僕はかなりの場所を探し回った

しかし居ない

だがその時空に二つの光…いや翼

少しだが人影が見える

ついて行ってみるか…？

「記憶の翼…」

これは生命の記憶で記憶したことを一時的に具現化して翼にする魔法

早さ的には追いつけるが

まだ何が何だかって感じた

しばらく跡を付けよう

そしてパラレルワールド

エドラスの冒険が始まる…

パラレルワールド（後書き）

ディメルは何故残っている？的な事を考えている人は…
はい0人デスネ！ まあ今後わかると思うんで
あと感想等よろしくデス

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4981x/>

運命の導き…妖精の尻尾の物語

2011年10月29日23時09分発行